

I. 導入

おはようございます。先週、使徒言行録15章の学びに入りました。この章では、恵みの福音に対して異論が持ち上がりましたが、すぐに覆されました。使徒15:5 は、異論の内容をこう記しています。「ところが、ファリサイ派から信者になった人が数名立って、『異邦人にも割礼を受けさせて、モーセの律法を守るように命じるべきだ』と言った。」

使徒15:11で、この異論を真っ向から否定すべく答えたペトロの言葉は、説得力のあるものでした。「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」恵みの教理を裏付けるいくつかの証の後に、今度はヤコブが預言者アモスの言葉を引用しました。恵みの教えが旧約聖書と矛盾しないことを示すためです。そして、結論を述べました。使徒15:19 「それで、わたしはこう判断します。神に立ち帰る異邦人を悩ませてはなりません。」



エルサレムの使徒と長老たちは、ただ恵みによる救いという教えを全面的に支持していました。ここではっきりしたのは、割礼やモーセの律法の遵守といった厳しい重荷を異邦人に負わせるべきではないことです。異邦人がイエス・キリストのもとに来て救われるなら、無条件に迎え入れるべきなのです。のちに、テトスへの手紙でパウロはこう書いています。テトス2:11 「実に、すべての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました。」

GRACE
alone

重要な決議がなされました。ヤコブは続いて、異邦人が従うべき教えについていくつか補足しています。その内容について、使徒15:22-33を読みましょう。

II. 聖書朗読 (使徒言行録15:22-33, 新共同訳)

15:22 そこで、使徒たちと長老たちは、教会全体と共に、自分たちの中から人を選んで、パウロやバルナバと一緒にアンティオキアに派遣することを決定した。選ばれたのは、バルサバと呼ばれるユダおよびシラスで、兄弟たちの中で指導的な立場にいた人たちである。15:23 使徒たちは、次の手紙を彼らに託した。

「使徒と長老たちが兄弟として、アンティオキアとシリア州とキリキア州に住む、異邦人の兄弟たちに挨拶いたします。15:24 聞くところによると、わたしたちのうちのある者がそちらへ行き、わたしたちから何の指示もないのに、いろいろなことを言って、あなたがたを騒がせ動揺させたとのことです。15:25 それで、人を選び、わたしたちの愛するバルナバとパウロとに同行させて、そちらに派遣することを、わたしたちは満場一致で決定し

ました。15:26 このバルナバとパウロは、わたしたちの主イエス・キリストの名のために身を献げている人たちです。15:27 それで、ユダとシラスを選んで派遣しますが、彼らは同じことを口頭でも説明するでしょう。15:28 聖霊とわたしたちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。

15:29 すなわち、偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けることです。以上を慎めばよいのです。健康を祈ります。」

15:30 さて、彼ら一同は見送りを受けて出発し、アンティオキアに到着すると、信者全体を集めて手紙を手渡した。15:31 彼らはそれを読み、励ましの満ちた決定を知って喜んだ。15:32 ユダとシラスは預言する者でもあったので、いろいろと話をして兄弟たちを励まし力づけ、15:33 しばらくここに滞在した後、兄弟たちから送別の挨拶を受けて見送られ、自分たちを派遣した人々のところへ帰って行った。

III. 教え

手紙はこうはじまります。使徒15:23b 「使徒と長老たちが兄弟として、アンティオキアとシリア州とキリキア州に住む、異邦人の兄弟たちに挨拶いたします。」これは、エルサレムの使徒と長老たちからの手紙ですから、必然的に権威あるものとなります。しかし、使徒と長老たちは異邦人の信徒たちに向かって、「兄弟として」と記しています。使徒や長老の指導者としての役割はあっても、信徒同士は神の御座の前に兄弟なのです。クリスチャンの同胞、つまり、イエスの十字架で与えられた神の恵みによって救われた者同士です。



続いてこの手紙は、割礼やモーセの律法の遵守を説いた者たちには、そのような権限がなかったと明言します。そして、この手紙の要点が使徒15:28-29に続きます。「15:28 聖霊とわたしたちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。15:29 すなわち、偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けることです。以上を慎めばよいのです。健康を祈ります。」

使徒と長老たちは、恵みの教えを支持する内容の短い手紙を送り、アンティオキアの教会はこれを喜んで受け取りました。この内容から、当時の弟子たちは手紙の意図するところをしっかりと理解し、それによって元気づけられたことがわかります。年月が流れると、はっきりとしていたはずの認識が薄れ、解釈の相違が出てくるようになりました。今日では、この手紙についてさまざまな意見があります。次に挙げるのは、この個所にある禁止事項の出元について、広く知られた仮説です。

1. レビ記17-18章にある律法が在留異国人に対して適用されたことから
2. 洪水の後にノアに与えられた掟から
3. 教会で異邦人とユダヤ人が食事をとる際、ユダヤ人の気分を害さないため
4. これらの禁止事項は、当時のこの地域における偶像礼拝で一般的に行われていた

ことだったので、異邦人の信徒が偶像礼拝へと後戻りしないよう守るため

どの仮説が正しいのでしょうか。聖書学者や教派・教団の間に一致が見られない問題については、各々が示されたことを尊重できるようにすべきです。ただし、この件については、4番を除いてすべての仮説に反ばくを加えることができると思います。

まず、この手紙が旧約聖書に基づいているなら、そう書いていたでしょう。次に、ここに書かれた禁止事項は、レビ記17-18章の内容や、創世記で神がノアにおっしゃったことと合致しない部分があります。さらに、この手紙の目的は、恵みによる救いを肯定し、異邦人を律法から解放することだと前後の内容からわかります。ここに、モーセの律法やノアの契約に基づく禁止事項を適用するのは違和感があります。従って、1番と2番の仮説は、受け入れがたいということになります。3番の仮説にも問題があります。ユダヤ人と異邦人が食事の交わりをする場合、ユダヤ人の料理したものならこのような禁止事項がなくてもすでに問題ありません。しかし、異邦人の料理したものなら、豚肉をはじめ、モーセの律法で禁じられた食物が出てくるでしょう。この手紙が食事の交わりを円滑にするためのものなら、ユダヤ人が異邦人の食物を受け入れるようにと書き送る必要があります。

そうすると、私の考えでは、4番の仮説のみが明らかな矛盾点のないものに思われます。とくに、不品行を避けることと食事についての規則とが並べて挙げられている理由を説明できるのは、4番の仮説のみです。アンティオキアおよび周辺地域の偶像礼拝では、神殿娼婦がおり、血を飲む行為や料理のために動物を絞め殺す行為が行われていたといえます。偶像礼拝につながる行為を避けるよう異邦人の信徒たちに指示するのは、ごく自然なことです。これは新しい律法の導入ではなく、イエスへの信仰をきよく保つよう激励しているのです。

どういう場面かにもよりますが、教会でよくされる質問は、「この規則は今の私たちにもあてはまりますか」という内容です。性的不品行については、聖書の最初から最後まで一貫した教えですから、答えるのは簡単でしょう。では、食物の規則はどうでしょう。今日のクリスチャンは血を飲むことや、絞殺された動物の肉を食べるのを避ける必要があるでしょうか。食材を買う前に、それが偶像にささげられたものか確認する必要があるでしょうか。

偶像礼拝と関係する行為を避けるようにと信徒に教えることがこの手紙の趣旨だと私は思います。それが正しければ、私たちの置かれた文化における偶像礼拝と関わる行為を避けるというのが、正しい適用です。私たちは日本に住んでいますので、それに即した例を挙げてみましょう。

日本の伝統では、毎朝家の仏壇にご飯や果物などの食べ物をお供えます。しばらく経ったらそれは食べます。クリスチャンは仏壇に供えた食べ物を食べるべきでしょうか。使徒と長老たちは、偶像にささげられた食べ物を避けるよう異邦人の信徒たちに指示しました。仏壇のお供えも同様に考えられます。



これを食べたなら、救いを失うでしょうか。そんなことはありません

ん。私たちは行いではなく恵みによって救われるのです。これを食べるのは罪でしょうか。そうとは言い切れません。あなたがその仏壇を信心していなくて、誰も見ていなければ、あなたにとってそれは罪ではありません。けれども、たいていの場合誰かの目があります。仏教を信じる家族は、仏壇に供えた食べ物を食べれば霊力がつくと思っているかもしれません。あなたがいつしよにその食べ物を食べると、家族にとってクリスチャンとしての良い証にならない可能性があります。

コリントの教会への手紙で、パウロはこの問題を詳しく取り上げています。パウロがこの件について何と言っているかじっくり読んで、各々どうすべきか祈ることをお勧めします。手始めとして、コリント第一10:25-29でパウロがなんとやっているか読みましょう。

10:25 市場で売っているものは、良心の問題としていちいち詮索せず、何でも食べなさい。**10:26** 「地とそこに満ちているものは、主のもの」だからです。**10:27** あなたがたが、信仰を持っていない人から招待され、それに応じる場合、自分の前に出されるものは、良心の問題としていちいち詮索せず、何でも食べなさい。**10:28** しかし、もしだれかがあなたがたに、「これは偶像に供えられた肉です」と言うなら、その人のため、また、良心のために食べてはいけません。**10:29** わたしがこの場合、「良心」と言うのは、自分の良心ではなく、そのように言う他人の良心のことです。どうしてわたしの自由が、他人の良心によって左右されることがありましょう。

エルサレムの使徒と長老たちが手紙を書いた第一の目的は、恵みによる救いを肯定することでした。ユダヤ人がとくに嫌悪する行為を控えるよう、異邦人信徒に要請することによって、おそらく、ユダヤ人と異邦人の信徒間の人間関係をスムーズにするという目的も付随していたでしょう。

しかし、この手紙に書かれた禁止事項の一番の目的は、偶像礼拝との関わりに対する警告です。これは、現代の私たちも心すべき内容です。偶像はクリスチャンに何の力も及ぼせません。神の御霊が私たちのうちにおられるからです。また、みことばがこう約束します。ヨハネ第一4:4 「4:4 子たちよ、あなたがたは神に属しており、偽預言者たちに打ち勝ちました。なぜなら、あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです。」これは事実ですが、同時に、私たちは誰もつまづかせないようにしたいものです。また、誘惑に陥らないよう気をつけるべきです。続いて使徒15:35-41を読みましょう。

IV. 聖書朗読 (使徒言行録15:35-41新共同訳)

15:35 しかし、パウロとバルナバはアンティオキアにとどまって教え、他の多くの人と一緒に主の言葉の福音を告げ知らせた。15:36 数日の後、パウロはバルナバに言った。「さあ、前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し、どのようにしているかを見て来ようではないか。」15:37 バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネも連れて行きたいと思った。15:38 しかしパウロは、前にパンフィリア州で自分たちから離れ、宣教と一緒に行かなかったような者は、連れて行くべきでないと考えた。15:39 そこ

で、意見が激しく衝突し、彼らはついに別行動をとるようになって、バルナバはマルコを連れてキプロス島へ向かって船出したが、15:40 一方、パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて、出発した。15:41 そして、シリア州やキリキア州を回って教会を力づけた。

V. 教え

パウロとバルナバは、マルコと呼ばれるヨハネの件で意見が対立しました。マルコと呼ばれるヨハネは、第一次宣教旅行でバルナバとパウロに同行していましたが、途中でくじけて脱落してしまったようです。バルナバは彼にやり直しのチャンスを与えたいと思います。パウロはダメだと言います。パウロは、恵みの教理についてのエルサレムの大論争で勝利を取めたばかりでしたが、神の恵みを説くほうが、実際に身近な人に恵みを施すよりは簡単なのでしょう。これはパウロらしくない姿ですが、主はこれも益として用いてくださいました。ふたりの対立の結果、ひとつではなくふたつの宣教チームが出かけることになったのです。



マルコと呼ばれるヨハネの働きは、好調なスタートではありませんでした。しかし、彼に対する主の働きは終わっていませんでした。神の恵みとバルナバの励ましによって、このマルコと呼ばれるヨハネは、のちにマルコによる福音書の著者となりました。また、パウロとも和解し、後年にはパウロもマルコのことを高く評価しています。

働きを始めてまもない人は、失敗ばかりしているように見えるかもしれません。あきらめて去っていく場合もあります。そんなとき、マルコと呼ばれるヨハネのことを思い出してください。そして、信仰の目でその人たちのことを見てあげてください。その人たちの今の姿で判断するのではなく、信仰の目でその人たちの将来の可能性を見てあげてください。鏡の中の自分を見るときも、同じように信仰の目を向けてあげましょう。失敗した、または、つらい経験をした過去があるでしょうか。神の働きをしていたけれど、くじけてあきらめてしまったことがあるでしょうか。忘れないでください。神は私たちに恵みを与えてくださいました。だから、私たちも人に恵みを与えるよう努めなければなりません。自分自身に対してもそうです。



今日のメッセージを終える前に、もう少し進みましょう。使徒16:1-5

VI. 聖書朗読 (使徒言行録16:1-5, 新共同訳)

16:1 パウロは、デルベにもリストラにも行った。そこに、信者のユダヤ婦人の子で、ギリシア人を父親に持つ、テモテという弟子がいた。16:2 彼は、リストラとイコニオンの兄弟の間で評判の良い人であった。16:3 パウロは、このテモテと一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を授けた。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。16:4 彼らは方々の町を巡回して、エルサレムの使徒と長老たちが決めた規定を守るようにと、人々に伝えた。16:5 こうして、教会は信仰を強めら

れ、日ごとに人数が増えていった。

VII. 教え

この箇所は、明るいトーンで締めくくられています。使徒16:5「こうして、教会は信仰を強められ、日ごとに人数が増えていった。」ハレルヤ！この箇所で、テモテが登場します。彼はパウロの親しい同労者となる人です。パウロが書いたテモテへの手紙は皆さんおなじみの書簡です。ここで、パウロとテモテと一緒に旅に出たことがわかります。エルサレムの使徒と長老による決議を各教会に伝えるためです。

使徒16:3で非常に興味深いことが起こります。「パウロは、このテモテと一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を授けた。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。」ほんの少し前、パウロとバルナバはエルサレムへ赴き、異邦人が割礼を受ける必要がないという使徒と長老の判断を得たところでした。なのに、パウロはテモテと一緒に連れていく前に割礼を授けました。恵みの福音についてパウロの信条が揺らいだのでしょうか。そうではありません。むしろ、恵みの福音についてエルサレムで論争に勝利したからこそ、テモテに割礼を授けることをよしとしたのです。ユダヤ人に対する福音宣教がスムーズに進められるためです。パウロは律法的な儀式を否定しましたが、とても合理的な人です。モーセの律法が救いに必要だという議論は徹底的に否定しますが、恵みの福音を告げ知らせるのに役立つのであれば、ユダヤ人の律法に喜んで従いました。

VIII. 結び

何年か経って、パウロはローマ15:7にこう記しています。「だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。」自分より弱い兄弟姉妹を受け入れて、その人たちに合わせてあげましょう。イエスと歩み始めてすぐ失敗した人ですか。その人たちのことをあきらめしないで、バルナバがマルコと呼ばれるヨハネを励ましたように励ましてあげましょう。不必要だと確信して言えるような儀式や慣習にこだわる人がいますか。恵みの教理に抵触しない限り、その人たちの言うことを聞きいれてあげればよいのです。パウロがテモテに割礼を授けたのは、ユダヤ人の言うことを聞きいれてあげるためです。

互いに相手を受け入れましょう。自分自身も受け入れましょう。キリストがあなたを受け入れてくださったからです。律法にとらわれないようにしましょう。けれども、あなたの行動が他の人をつまずかせるようなら、自分の自由をふりかざしてはいけません。私たちは皆恵みが必要だということを、常に覚えていてください。

これは先週も皆さんにお話しましたが、今日の締めくくりとしてもう一度お話しします。1999年11月、ルーテル世界連盟とローマ・カトリック教会は、「義認の教理に関する共同宣言」を出しました。そこにはこのような内容が盛り込まれています。

「我々はともに宣言する。我々は、己の功績によらず、ただ恵みにより、キリストの救い

のみわざを信じる信仰において、神に受け入れられ、聖霊を受ける。この聖霊によって、我々の心は新たにされ、良い行いへと備え、召される。」

私たちの主イエス・キリストの教会は、あらゆる意味で分裂しています。ですから、一致への歩み寄りとはそれが小さな一歩でも見逃さずに喜びたいものです。私たちOICには、教会の伝統や文化背景が異なる人たちが集まっています。そこには、互いに愛をもって恵みを与え、受け入れ合う機会がたくさんあります。私たちの努力がイエスの祈られた一致への小さな一歩となるよう祈ります。ヨハネ17:23「わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。」

祈りましょう

IX. 祈り